

## ヤコブソンと年上の友人たち

大平陽一

### 1. 実務家としてのヤコブソン

恐らく、私のような者に原稿依頼があること自体が、ヤコブソンへの関心の低下を物語っているのだろう。かつては、佐藤純一先生が『世界大百科事典』の「ヤコブソン」の項目に書いておられるように、「ヤコブソンが情熱を傾けたもう一つ分野としては〈詩学〉すなわち詩的言語の研究があるが[...]この分野には熱心な追随者が多」かった。私自身も熱心とは言えぬまでも、それでもヤコブソンの本はくり返して読んだものであったが、今では追随者ですらなく、かつての恩義を忘れたかのように、たとえば『ロシア・フォルマリズム再考』（せりか書房、2012年）に寄稿した文章でも、ヤコブソン詩学について批判的な言辞を弄した。実は、この論集に私は途中から参加したのだが、その理由はオポヤーズについての論考ばかりで、モスクワ言語学サークルのメンバーについて書く者が誰もいないからであった。実際、『再考』の実質的な編集主幹であった野中進さんは、ある論文の中で次のように書いている。

ロマン・ヤコブソンは構造主義ブームのしかけ人として意識的にキーワードを打ち出した観がある。「メタファーとメトニミー」、「コミュニケーション 6 機能モデル」、「詩的言語の自己言及性」などは、汎用性の高いキーワードとして 1980 年代までは広く流布していた。だが 1990 年代以降今日に至るまで、これらのキーワードは文学辞典・用語集類に記載はあっても、以前のように用いられていない。一言で言って、ヤコブソンの思想のキーワード化は一サイクルを終えた段階にある。<sup>1</sup>

しかし、その野中さんは、さまざまなシンポジウムや研究会の有能な組織者としてヤコブソンを彷彿させるところがある。遅ればせながら自分も学会の業務に関わるようになって、ヤコブソンの組織力・実務能力・交渉力等がなければ 20 世紀の言語学と詩学の歴史は変わっていたのではないかと感じるようになった。ジョルジュ・ムーナンが言う通り「ヤ

<sup>1</sup> 野中進「パフチンは謎めいた思想家だったか?」『埼玉大学紀要（教養学部）』第 47 巻，第 1 号，2011 年，121 頁。

コブソン一流の実行力がなかったならば、音韻論はハーグにおけるあの輝かしい理論的突破口の切り開きに成功はしなかっただろうし、プラハの外、スラヴ研究の外へ出て威力を示すまでに、きっと、ひじょうに長い時を費やしたにちがいない。<sup>2</sup>

概してヤコブソンに対して批判的なムーナンは「周囲から刺激があれば活動するというたちだった」、「対談や会議のときほど彼が華やかに目立つことはない」と揶揄するように書く。<sup>3</sup>しかし、この評言は素直に理解しても良いのではないか。実際、多士済々のプラハ言語学サークルにおいてさえ、ヤコブソンのいない研究会は火が消えたように盛り上がりや欠いたらしい。

同じくムーナンは、ヤコブソンの業績には多くの協力者との共著が多い事実を次のように指摘する。

彼は協同作業の得意な人でもある。相互的な刺激が彼にとってもっとも自然な本領だとでもいうような具合なのだ。1928-1938年のあいだの[...]偉大な生産性の秘密も、おそらくそこにあるのだろう。プラハ言語学サークルのようなチームの強力な参加があり、しかもそれがトゥルベツコイの支配的な考察によって支えられていたのだから、もっともと言うべきだろう。それ以後のヤコブソンの二つの著作もこの性格をとどめている。それが、ファントとハレとの共著、およびハレだけとの共著である。<sup>4</sup>

しかし、彼は会議におけるスター的存在であっただけではない。それらの会議の組織者、運営者として図抜けた実務能力と交渉力を備えてもいた。その有能さは、6歳年上の畏友トゥルベツコイとの文通からもうかがえるように思う。

1930年の11月13日付けの書簡の中で、ヤコブソンは翌月に迫った国際音韻論会議について「チェコ人は方法論に則して仕事をする民族なので、不慮の出来事に対応する臨機応変さがほとんどありません。そのため、会議の準備の大部分が私の上のし掛かってきます」と愚痴をこぼしている。<sup>5</sup>しかし、愚痴の相手のトゥルベツコイも10月12日付けの手紙で、ジュネーヴ在住のカルツェフスキイが参加できるよう、原稿料と旅費を支払ってやれないかと頼み込んでいるのだから、ヤコブソンに同情したくもなる。しかも、年下の友人の実務能力を信じ切っていたのだから、ヤコブソンの返事も待たずに「金銭面のことは貴兄ができる限りのことをしてくれると書いてやるつもりだ」と書いてくる始末だ。<sup>6</sup>

<sup>2</sup> ジョルジュ・ムーナン（佐藤信夫訳）『二十世紀の言語学』白水社、1974年、166頁。

<sup>3</sup> 同上、164頁。

<sup>4</sup> 同上、165頁。

<sup>5</sup> Якобсон Р.О. Письма и заметки Н. С. Трубецкого. М., 2004. С. 181.

<sup>6</sup> Там же.. С. 179.

結局、カルツェフスキイは音韻論会議で「句の音韻論」という発表を行い、それは翌年刊行された『プラハ言語学サークル論叢 *TCLP*』第4号に掲載され、いまではカルツェフスキイの主要な業績の一つに数えられているのだから、ヤコブソンの尽力が奏功したというべきだろう。<sup>7</sup>

11月20日付けの手紙でもトゥルベツコイは、当時のオーストリアの経済危機に触れ、ウィーン大学教授の自分にとってもプラハまでの鉄道運賃の割引が実現すればありがたいのだが…とヤコブソンに問い合わせている。<sup>8</sup> この手紙に対するヤコブソンの返事は次の通り。

月曜日には「事前プログラム」が発送されます。プログラムには「実用情報」が添付されていますが、そこには開催期間中の18日から21日までの4日間は、全参加者に対しサークルが昼食と夕食を提供するとの、ホテルに関しても、宿泊費を負担することはできないが予約の代行はする旨の記載があります。「実用情報」には部屋代は36コルナからとありますが、もちろんそれでは高すぎるという人は、もっと安い部屋を探してくれとサークルに依頼の手紙を出すことができます。当然、快適さでは劣るホテルになりますが、大体22コルナぐらいからあります。旅費について配布文書には何の記載もありませんが、プファルトとチェルマクにはつきりと、彼らに（そしてもちろん大兄にも）、国境からプラハまでの3等の無料往復切符が支給されることになっているとお伝えいただいて構いません[...]。つまり大兄には会議がらみの出費を危惧なさる必要はないのです。我が家に泊まり、会議までの間はうちで、会議の間中は皆と一緒にクラブで食事するのですから、オーストリア国内の旅費と市電以外には、何の出費もないはずで。<sup>9</sup>

すでに引用したムーナンの評言の通り、「周囲から刺激があれば活動するというたちの、相互的な刺激が彼にとってもっとも自然な本領だった」ヤコブソンの交友関係は、当然ながら広く、多彩——彼の政治的信条を覆い隠して見えなくするほど多彩であった。

20歳になるやならずで、マヤコフスキイをはじめ、マレーヴィッチ、フレーブニコフ、クルチョーヌイフらロシア・アヴァンギャルドの大立て者と対等の友情を取り結んでいたことはよく知られている。フレーブニコフを論じた『もっとも新しいロシアの詩』、マヤコフスキイの死を受けて書かれた痛切な論文「自分たちの詩人たちを使い果たした世代について」は、今は古びた感のあるヤコブソンの詩論の中では例外的に再読に足る。それと

<sup>7</sup> Там же. С. 179.

<sup>8</sup> Там же. С. 186.

<sup>9</sup> Там же. С. 186.

いうのも（身も蓋もないことを言うようだが）、そこに革命詩人の親友、革命的芸術の使徒としての熱意が込められているからだろう。チェコ時代にもアヴァンギャルディストのグループ《デヴェトスィル》に正式メンバーとして迎えられていた。

こうしたヤコブソン一流のコネクションについて、モスクワ、プラハ——二つの言語学サークルのメンバーだったボガトウイリヨフは、あるインタビューの中で次のように語っている。

ヤコブソンがモスクワ言語学サークルに絶えず新しい人を引き入れていたことは、評価する必要があります。実際、マヤコフスキイはよく私たちの会を訪れ、初めて叙事詩「15000」を朗読したのも我々のサークルだったのです。[...] 文学理論家の仕事に作家や詩人が参加したのは、ヤコブソンの功績です。こうしたアプローチがプラハ言語学サークルの基礎にも据えられました。<sup>10</sup>

その一方で、ヤコブソンの言語学上の盟友であり、音韻論確立のために大きな業績を残した言語学者のトゥルベツコイと正教に改宗する時、代父を務めてくれた地理学者のピョートル・サヴィツキイは、周知の通り、ユーラシア主義の創始者としても知られる人物であり、彼らの影響のもとでヤコブソンは「ユーラシア言語連合の性格に寄せて」（1931）という重要な業績を残してもいるのだから、ほとんど無節操なほどの交友関係である。

しかし、そんな中でもモスクワ大学の先輩であるニコライ・トゥルベツコイ（1890-1938）、3歳年上の上級生のピョートル・ボガトウイリヨフ（1893-1971）、そしてモスクワ大学時代の恩師であった20歳年上のニコライ・ドゥルノヴォ（1876-1937）とヤコブソン（1896-1982）の間柄は特別であったように見受けられる。

## 2. スパイとしてのヤコブソン

3人のうちでもっとも歳が近かったのは、フォークロア研究者のボガトウイリヨフである。ヤコブソンの回想によれば、二人の友情はボガトウイリヨフが3年生、ヤコブソンが新生生であった1914年の8月に遡る。新学期の科目登録ために行列に並んでいた時に言葉を交わしたのが切っ掛けだった。「不思議に思われるかも知れないが、会話はすぐに二人の思い描いていた未来の研究に集中した。彼は共同でフォークロアと方言学のフィールドワークに行こうと提案し、実際、数か月後にモスクワ県ヴェレヤ郡でその調査を行った」

---

<sup>10</sup> *Лещак М., Шведлик С.* Разговор на прощание // Петр Григорьевич Богатырев: Воспоминания. Документы. Статьи / Под ред. Л.П. Солнцева. СПб., 2002. С. 48.

とヤコブソンは述懐している。<sup>11</sup>

一方ボガトウイリョフは、上記インタビューの中で次のように語っている。

まだ学生だった頃、私は口碑文学委員会に出入りしていました。そのことはある程度周知のことであったにもかかわらず、ロマン・オーシボヴィチはいつも私を言語学者たちのところへ連れて行ったのです。このことは私の仕事に反映されずにはすみませんでした。ある時期、二人で科学アカデミー附属の方言委員会の仕事にも参加していました。そこで私は民族誌学を研究すると同時に、フォークロア部門でも仕事をし、研究発表をしたりしました。委員会に入ったのは私が1914年で、ヤコブソンは、私より後でした。<sup>12</sup>

このように証言を二つ並べてみると、年上のボガトウイリョフが方言委員会にまず誘ったように思われる。ちなみに、この方言委員会を主導していたのが、二人のモスクワ大学での先生でもあったドゥルノヴォであった。

その後、1915年に二人を中心に7名の学生によるサークルが結成され、ヤコブソンが会長の座に就く。これが後世名高いモスクワ言語学サークル(1915-1924)である。この私的な学生サークルは、しかし、若いながらも真摯で勢力的な研究活動によってドゥルノヴォやウシャコフら、年長世代のすぐれた研究者の注目を惹き、1918年の秋からは法人格を認められた。教育人民委員部・学術総局のネットワークに組み込まれ、国庫より助成金を得るようになったのである。ヤコブソンはプラハに移り住むまでの間(1915-1919)会長の座にあったが、それは十代のおわりから二十代の前半までのこと、今の日本で言えばまだ学部生の年頃であった。

その後1920年にヤコブソンはエストニア経由でプラハに移り住む。正式国交のないチェコスロヴァキア共和国との間で、捕虜交換のために組織されたロシア・ソビエト連邦社会主義共和国赤十字使節団の通訳というのが、赴任当時の身分だった。その後この使節団はソ連邦全権代表部に改組され、ヤコブソンも28年までその職員として勤務しながら研究にいそしんでいた。その間、26年のプラハ言語学サークル創設時のオリジナル・メンバーの一人となったことは、よく知られている。

大学時代の親友ボガトウイリョフがプラハにやって来たのは、1922年頃のことで、彼も全権代表部で働くことになった。ボガトウイリョフの履歴を見ると、18年の大学卒業後の約4年間は空白になっている。恐らく定職のなかったボガトウイリョフは、ヤコブソンの口利きで全権代表部に職を得たのだらうと推測される。ただ、ソヴィエトの官僚主義

<sup>11</sup> Якобсон. Письма и заметки Н. С. Трубецкого. С. 37.

<sup>12</sup> Лещак, Шведлик. Разговор на прощание. С. 47.

のため、赴任当初は給料の遅配がひどく、ヤコブソンのアパートに居候していたらしい。この同居生活は長くつづいたようで、25年2月24日付けのドゥルノヴォ宛書簡には、今はプラハに来る必要はないと助言した後に、「ボガトウィリョフの奥さんが臨月なので、我が家はテンヤワンヤになりそうですから尚更です」という一節がある。<sup>13</sup> この時生まれた一人息子は、ヤコブソンによってコンスタンチンと名づけられた。

しかし、二人の盟友の運命はナチスのチェコスロヴァキア侵攻によって引き裂かれる。1939年、ユダヤ系のヤコブソンはチェコからデンマークに逃れ、その後スカンジナビアを経てアメリカに移住したのは周知の通りだ。

一方、ロシアに帰国したボガトウィリョフは1940年にモスクワ大学の教授になった。しかし、約10年後、移住先のアメリカで世界的な名声を獲得したヤコブソンとは対照的に、ボガトウィリョフは次々と不遇に見舞われるようになる。48年2月に民族誌協会の公開会議で「もっとも反動的な学派、現在の外国のブルジョワ的学派のひとつ」であるマリノフスキーの機能主義と共通点があると糾弾され、科学アカデミーから追放され、モスクワ大学教授の任も解かれた。チェコスロヴァキアに長くとどまり「非帰国者」と見做されたことが仇になった。後述の通り、すでに30年代はじめ、ボガトウィリョフはヤコブソンやトゥルベツコイと共に反ソ的な「ロシア国民党」の創設者の一人と目されていた。48年5月、ジュネーヴ在住のカルツェフスキイに宛てた手紙の中でヤコブソンは、ボガトウィリョフについて「最近、そのフォークロア研究におけるプログラムが、ジュダーノフの路線を遵守していないからと専門誌上で攻撃されており、私が間接的に知るところによれば、かなり難しい状況にあるようです」と憂慮している。<sup>14</sup>

それでも不幸中の幸いと言うべきか、1952年になってボガトウィリョフはボロネジ大学に拾われたのだが、そこも59年には解雇され、世界文学研究所の研究者としての給与だけで糊口をしのがねばならなかった。古ロシア文学研究の権威として知られるニコライ・グジーイのお陰でモスクワ大学に復帰できたのは、64年のことになる。この間、プラハ生まれの一人息子コンスタンチンも、1951年にテロリストとして逮捕され、当初は死刑判決を受けていた（その後、流刑25年に減刑）。これまた不幸中の幸いにも、56年3月には釈放されはしたが、ボガトウィリョフ夫人の心労は絶えなかったにちがいない。

1956年には、ヤコブソンが国際スラヴィスト委員会の会合のためにモスクワを訪れたのを契機に、二人の間で再び文通が始まったが、二人が相まみえるのは2年後の58年9月まで——モスクワで開催された第4回国際スラヴィスト会議まで待たねばならなかった。

<sup>13</sup> Jindřich Toman, ed., *Letters and Other Materials from Moscow and Prague Linguistic Circles, 1912-1945* (Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, 1994), p. 89.

<sup>14</sup> Баран Х. О П. Г. Богатыреве: По материалам архива Р. О. Якобсона // Петр Григорьевич Богатырев: Воспоминания. Документы. Статьи. С. 141.

しかも、二人が涙ながらに久闊を叙するため、さらなる悲喜劇を経ねばならなかった。

当時、ボガトウィリョフは世界文学研究所の研究員を兼務していたが、スラヴィスト会議を目前に控えたある日、所長から呼び出され、次のような下問を受けた。「あなたの以前の友人が、たとえばヤコブソン氏が来る可能性がひじょうに高いということをご存知か?」。ボガトウィリョフが「彼が来るのはたいへん素晴らしいことです」と素直に返事をする、待ってましたとばかりに「つまりあなたは彼のスパイ活動に賛同しているわけですね」と言って、スラヴィスト会議の期間中レニングラードに出張するように命じた。「あなたがヤコブソン氏ほかの旧友たちと急に会うことは不都合きわまると、非難に値するとさえ言えます」というのが、その理由だった。当時のソ連では、ヤコブソンは西側のスパイだと——1948年の共産党のクーデター後にロンドンに成立したチェコスロヴァキア亡命政府に透明のインクを使った報告書を送っていると——まことしやかに語られていたらしい。<sup>15</sup>

大会運営委員長のヴィクトル・ヴィノグラードフを補佐していたミハイル・ロビンソンの回想するところによれば、ほどなく友人や教え子たちが「ボガトウィリョフはどこだ?」と騒ぎだしたのだという。病気なのではないかということで落ち着きかけたが、誰かが自宅に電話をしてみると病気ではないが、どこにいるか答えることはできない、という要領を得ない答えが返ってきた。家人としては、まさかレニングラードに出張中だと言えぬわけがなかった。明らかにおかしな状況に、ヤコブソンが「そもそも私はスパイだから」とほとんど諦めたように呟くと、「アメリカ代表団として声明文を提出してくる」と言い、ウィリアム・エジャトンがヴィノグラードフの部屋に向かった。エジャトンは慇懃な態度で「各国代表団は傑出したスラヴィストであり、我々の尊敬おくあたわざる人格者ピョートル・グリゴリエヴィチ・ボガトウィリョフに会いたいと思っているにもかかわらず、彼がどこにいるのか分かりません。したがって、アメリカ合衆国代表団の名において私は、プログラムに彼の名前が載っており、それまでは逮捕されていなかったにもかかわらず、大会直前になって逮捕された、という印象を禁じ得ないと申し上げねばなりません」と宣言した。このエジャトンの「脅迫」が功を奏したお陰で、翌日ヤコブソンは、急遽呼び戻されたボガトウィリョフと再会を果たすことができたのだという。<sup>16</sup>

実は、ヤコブソンは1920年代のチェコスロヴァキアでもソヴィエトのスパイではないかと疑われていた。すでに述べた通り、ヤコブソンは公爵トゥルベツコイのような「亡命者」ではなく、捕虜交換の交渉にあたるソ連赤十字使節団の一員としてプラハに赴任して

<sup>15</sup> Робинсон М.А., Досталь М.А. Переписка Р. О. Якобсона и П. Г. Богатырева // Славяноведение. 1994. № 4. С. 70.

<sup>16</sup> Там же. С. 71.

いた。インドジフ・トマンが指摘する通り、そもそもソヴィエト外交団で働いていたという事実自体が、通常の亡命ロシア人像と相容れなかったのである。<sup>17</sup> ましてや、ヤコブソンは当初からソヴィエトの革命文化の使徒を自認し、その姿勢を隠すことがなかった。彼は左翼系雑誌を中心に、ソ連のアヴァンギャルド芸術についての紹介記事や論文を発表していた。ヤコブソンをソ連のスパイではないのかという懐疑の目で見っていたのは、祖国を追われた亡命者だけではなくのも、当時の政治情勢からすれば当然だったのかも知れない。後にヤコブソンらと共にプラハ言語学サークルを立ち上げ、その会長の座に就くヴィレーム・マテジウスやマサリク大統領からは全幅の信頼を寄せられていた一方で、マサリクから亡命ロシア人支援の実務面を任されていたヨセフ・ギルサや首相のカレル・クラマシュのような政府要人でさえ、ヤコブソンがソ連のスパイだと信じ、そう公言していたのだという。<sup>18</sup>

このように見てくると、チェコ時代がボガトウイリョフに災厄をもたらしたようにも思えてくるが、ボグスラフ・ベネシュが言う通り、「1920年から38年までの時期は、ボガトウイリョフによってきわめて多産な時期であった」のはまちがいない。<sup>19</sup> 亡くなる数か月前に出版された論文集『民衆芸術の諸問題』（1971）についての書評で、ドミートリイ・リハチョフは、この論文集が出るまで著者ボガトウイリョフの名は母国ロシアの読者たちにとってほとんど無名であったと嘆き、研究者として教師としてボガトウイリョフが大きな役割を演じたのはチェコスロヴァキアであったと指摘しているという。<sup>20</sup>

1956年に再開されたヤコブソンとボガトウイリョフの文通は、検閲を意識しながらも続いた。二人の文通からは、ヤコブソンがリハチョフに著書や抜き刷りを送っていたことが分かる。<sup>21</sup> さらに、リハチョフのような斯界の権威だけでなく、将来有望な若手研究者たちとも知り合い、彼らの仕事に注目していたことが、たとえば1962年10月11日にボガトウイリョフに宛てたヤコブソンの手紙からうかがえる。

それとザリズニャークの露仏辞典がどうしても欲しいので、コマーに手伝ってもらって何とか手に入れ、送って下さい。どうかお願いします。<sup>22</sup>

<sup>17</sup> Jindřich Toman, *The Magic of Common Language: Jakobson, Mathesius, Trubetzkoy, and the Prague Linguistic Circle* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1995), p. 41.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 89.

<sup>19</sup> Бенеш Б. Мои воспоминания о Петре Григорьевиче Богатыреве // Петр Григорьевич Богатырев: Воспоминания. Документы. Статьи. С. 42.

<sup>20</sup> Roman Jakobson, “Pëtr Bogatyrev [29. I. 93-18. VIII. 71]: Expert in Transfiguration,” in Ladislav Matejka, ed., *Sound, Sign and Meaning: Quinquagenary of the Prague Linguistic School, 2<sup>nd</sup> printing* (Ann Arbor: Michigan Slavic Contributions, 1976), p. 36.

<sup>21</sup> Робинсон, Досталь. Переписка Р. О. Якобсона и П. Г. Богатырева. С. 83.

<sup>22</sup> Там же. С. 80.

コマーとは言語学者・記号学者のヴァチスラフ・イヴァーノフのこと。ザリズニャークについては、ボガトウイリョフからヤコブソンに宛てた 65 年 8 月 2 日付けの手紙で「うれしいニュースをひとつ」と、近々ザリズニャークの学位論文の公開審査が行われることを知らせている。今や 80 歳を過ぎたザリズニャークは、最近«За верность науке»という賞を受けたが、『イーゴリ軍記』贋作説を論破したことが受賞の理由になっただけらしい。<sup>23</sup> 周知の通り、ザリズニャークはすでにこのテーマで『イーゴリ軍記：言語学者の見方』（2004 年）を上梓している。『イーゴリ軍記』が書かれたのは早くとも 16 世紀であり、それ以前に遡ることはないというマゾンやジミーンの「贋作説」が誤りであることの証明は、ヤコブソンの研究にとっても重要なテーマの一つであり、ヤコブソンとザリズニャークの間に国境を越えて流れる学統を感じさせる。

同様のつながりは、ザリズニャークとドゥルノヴォ——ヤコブソンやボガトウイリョフの先生であったニコライ・ドゥルノヴォ——との間にも存在するらしい。東大スラヴ専攻の紀要で Википедия の記述を紹介するのは申し訳ないが、ドゥルノヴォの項目によれば、現代ロシア語の共時的記述がザリズニャークに影響を及ぼしているのだという。

### 3. 進路指導係としてのヤコブソン

1922 年にボガトウイリョフをプラハに呼び寄せたヤコブソンが、1924 年 5 月にチェコに招いたのは、モスクワ大学時代の二人の恩師ニコライ・ドゥルノヴォであった。先ほど触れた Википедия の記述によれば、ドゥルノヴォは革命後 1918 年から 21 年までサラトフ大学教授の座にあったが、沿ヴォルガ地方を襲った大飢饉のため健康を害してモスクワに戻り、その後 3 年間は定職のないまま暮らしていたらしい。窮状を見かねたヤコブソンの勧めで、チェコスロヴァキアへ 4 ヶ月間の予定で研究出張の許可を当局から取りつけ、1924 年、家族をモスクワに残したままモラヴィアのブルノに単身移り住んだのである。当面はブルノのマサリク大学を受け入れ先としてチェコスロヴァキア外務省から研究助成金を得て糊口をしのぎ、マサリク大学のスラヴ語・スラヴ文学教室の教授の座を狙うという作戦であったが、この作戦を立案したのはヤコブソンであった。この時期二人でやり取りされた手紙から浮かび上がってくるのは、20 歳年下の教え子が恩師の生活上の相談に乗り、就職活動について事細かに指導するという逆転した師弟関係である。

1924 年 11 月付けの長文の手紙からは、マサリク大学がドゥルノヴォを受け入れてくれ

<sup>23</sup> Подсокорский Н. Академик РАН Андрей Зализняк стал лауреатом премии «За верность науке» [[http://philologist.livejournal.com/9078313.html?utm\\_source=fbsharing&utm](http://philologist.livejournal.com/9078313.html?utm_source=fbsharing&utm)] (2017 年 2 月 20 日閲覧).

るよう、プラハでカレル大学教授のムルコ、フイエルや亡命ロシア人援助を主管していた外務省ルートに働きかけていることが読み取れる。まずは助成金を得るため、次のような指示が出される。

私の助言は（私が先生に助言できるとすれば、の話ですが）、次の通りです。何としてもブルノの教授連中、とりわけヴォンドラークに圧力をかけてから、学部の決定を待って下さい。[...] アパートが見つからなかったのなら、当分は探すのをやめ、一時的に安い部屋を借りて、そこで学部の決定を待ってください。フイエルもムルコも、圧力をかけるためにこの時期先生がブルノに滞在していらっしやるのが必須だと考えています。<sup>24</sup>

正式決定以前の書簡でヤコブソンは「外務省から受け取るお金の楽々半分はモスクワに送れます」と書いているが、実際ドゥルノヴォはモスクワの妻子に助成金の大半を送っていたらしい。その後、1925年いっぱいの研究助成の給付が正式決定されたものの、給付が遅れてドゥルノヴォは生活に窮してしまう。25年1月下旬の手紙には「もし助成金の遅れがまだしばらくつづくようでも、来月一日まで何とか持ちこたえて下さい。給料が出次第、お送りします」とある。<sup>25</sup>

同25年の、ただし日付も消印もない手紙には、就職活動について次のようにアドバイスされている。この時期、ヤコブソンはドゥルノヴォがマサリク大学のスラヴ学教授の最有力候補だと考えていたらしい。

ブルノのスラヴ文献学の空きポストの最有力候補は先生だと思しますので、すぐさまこの方向に添って大車輪で仕事に精出していただく必要があります。いまの助成金が1926年まで延長できるかどうか見込みが立ちませんから。[...] すぐにブルノの教授にアタックして下さい。[...] パスポートは書留で送って下さい。先生に代わって私が延長手続きをします。率直に申し上げて、上京して戴くには及びません。いまいばん肝心なのは、プラハのスラヴ学研究室のポストを取り逃がさないことなのですから。<sup>26</sup>

プラハ言語学サークルの一員として精力的に活動し、チェコスロヴァキアで何冊か著書を刊行しはしたものの、結局ドゥルノヴォの就職活動は失敗に終わった。彼にとっては家族と離ればなれで暮らしたブルノ時代は、決して良い思い出にはならなかったにちがいな

---

<sup>24</sup> Toman, *Letters and Other Materials from Moscow and Prague Linguistic Circles*, p. 81.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 87.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 92.

い。1927年の暮れにベラルーシ科学アカデミーの招聘に応え、ドゥルノヴォはソ連に帰国した。2年弱の間は旺盛な研究活動を展開できたが、29年の暮れには政治的迫害の標的になってしまう。30年の1月にはもう、グリゴリー・イリインスキイがボリス・リャプーノフに宛て「気の毒なドゥルノヴォは、迫害の標的にされた結果、文字通り路頭に迷うはめになった。年金の支給さえ問題視されている」と伝えるまでになっていた。<sup>27</sup>

ベラルーシ・アカデミーの職を追われたドゥルノヴォは、合同国家保安部が知識人抹殺のために捏造した《ロシア民族党事件》(むしろ「スラヴィスト事件」として世に知られるでっち上げ事件)の首謀者として33年12月に逮捕され、10年の刑を宣告され、ソロヴェツキイ特別収容所へ流される。モロトフ人民委員会議長の暗殺計画から国外のロシア人ファシストとの結託やアカデミーの研究活動の妨害に至る荒唐無稽な罪状が並んでいるロシア民族党事件の告訴状の最初のページには、次のように書かれていた。

反革命的組織《ロシア民族党》はニコライ・トゥルベツコイ公爵、ロマン・ヤコブソン、ピョートル・ボガトウイリョフらの主導する在外ファシストのセンターから直接指令を受けて設立された。この党が組織されたのは1930年の前半、ニコライ・ドゥルノヴォ教授のモスクワへの帰還後のことである。<sup>28</sup>

ドゥルノヴォと同じ時期に帰国していればボガトウイリョフも逮捕を免れなかったこと、トゥルベツコイやヤコブソンから学問的刺激を受けたチェコ時代がドゥルノヴォの研究においてどれほど大きく重要な役割を果たしたにせよ、チェコでの3年間はドゥルノヴォの人生にとって致命的なものとなったことが、この文面から了解される。逮捕の約半年後の34年5月にはもう、トゥルベツコイはヤコブソンに宛てて次のように書いていた。

ところでドゥルノヴォと彼の息子について何か知らせはありますか。私の弟はトゥルケスタンに流されています。弟の娘(ドゥルノヴォの息子の若妻)も同様です。<sup>29</sup>

実際、トゥルベツコイの姪は1933年の大晦日に逮捕され3年の、弟は5年の流刑に処されていたが、37年10月に内務人民委員部・三人委員会は二人に死刑を宣告、父娘は翌11月に銃殺された。同様に、ニコライ・ドゥルノヴォも37年の再審で死刑判決を受けてその年のうちに、二人の息子も翌年に処刑されている。彼らとニコライ・トゥルベツコイ

<sup>27</sup> Робинсон М.А., Петровский Л.П. Н. Н. Дурново и Н. С. Трубецкой: Проблема евразийства в контексте «Дела славистов» (по материалам ОГПУ-НКВД) // Славяноведение. 1992. № 4. С. 71.

<sup>28</sup> Там же. С. 74.

<sup>29</sup> Якобсон. Письма и заметки Н. С. Трубецкого. С. 303.

との関係が、一連の判決において不利に働いたことは明らかである。

ソロヴェツキイ特別収容所の独房に収監されていたドウルノヴォが、34年8月11日、12日の両日に再尋問を受けた時の記録が供述書として残されている。その中のヤコブソンとトゥルベツコイとの交友について述べた箇所を訳出してみよう。

R. ヤコブソンとトゥルベツコイと私の間柄を、友人関係と定義できると私は思う。ヤコブソンとの交友は共通の学問的関心に基づいて始まった。これはわたしの教え子の中でももっとも才能豊かな研究者だ。すっかり健康を害してサラトフからモスクワに戻った1921年以降、大いに同情してくれた。当時彼はすでに国外に出ていた。1924年にロシア語辞典の編集委員会の閉鎖された後、私が失業状態にあった時、チェコスロヴァキアの彼の許に来よう提案してくれ、金銭的援助を約束してくれた。私がチェコに行った時、彼はチェコ外務省から助成金が得られるよう、私のために奔走してくれた。この助成金は、主にA. L. ペトロフのような亡命教授が受け取っていた。当時、ヤコブソンはソ連の使節団に勤務していた。 Kommunizму に対しては共感を持っていなかったが、亡命ロシア人からは距離を置いていた。彼の個人的な交友はひじょうに多彩で、チェコのコミュニストや《デヴェトスィル》のような左翼系の組織と親しい関係にあって、プラハ滞在中のエレンブルグやマヤコフスキイ、あるいは [...] ブロークやマヤコフスキイなどの翻訳者でもあるボフミル・マテジウスらと親しく交わる一方で、トゥルベツコイやカルツェフスキイとも友人関係にあった。彼の友人にはベネシウ外省の秘書パポウシェクも含まれていた。亡命ロシア人の大半は彼をソヴィエトのスパイと見做していた。 [...] 当時のヤコブソンは Kommunizму に共感を持ってはいなかったが、私に判断できる限り、ソヴィエト全権代表部での業務に関しては良心的に、ある程度の熱意をもって当たっていたと思う。<sup>30</sup>

もはや罪を逃れることを諦めていたのであろうか、ドウルノヴォの供述書にはこの通りヤコブソンを責めるような口吻はどこにもない。ドウルノヴォは、収容所でも当局から供与された文書の研究に打ち込んでいたのだという。

---

<sup>30</sup> Робинсон, Петровский. Н. Н. Дурново и Н. С. Трубецкой. С. 79.